【書院建具師】

荒川武夫

【現 住 所】和歌山市
【生　　年】明治45年

職　　歴

14才で上京し、伯父の経営する建具店で組子建具の技術を習得。

書院らんまや書院障子を中心にこの道一筋に励んでこられた。

業績の概要

細い木を複雑に組み合わせて作りあげる組子建具は、高度な技術と手間のかかる仕事である。

素材は、木曽ヒノキや吉野杉を用い、仕上げまでに7種類以上のかんなを使いわける。

作品は、伝統の「亀甲」、「三重亀甲」、「桜亀甲」、「菊」等をはじめ、特に高度な技術と熟練を要する「干し網」や「投げ網」の図柄を配した気品の高いものであり、業界誌「月刊建具工芸」にも数多く紹介されている。

昭和46年黒潮国体の際、両陛下のお泊所（和歌浦）の「長らんま」は氏の作品であり、和歌浦東照宮・石の間の桟唐戸のらんま修復にも技を発揮された。

また、最近では「組子」と「彫り」を合わせた衝立や屏風など、時代の好みに合った製品づくりにも意欲を燃やしている。